

オンラインレクチャーシリーズ 第6回 井谷恵子氏講演

「ジェンダー視点が照らす明日の体育－構造的に男性優位な学校体育を問う」

2026年2月20日（金）18：00～20：00

講師：井谷恵子氏（京都教育大学名誉教授）

司会進行：高峰修（明治大学）

高峰修：皆さん、こんばんは。第6回となる今回のレクチャーの講師は井谷恵子先生です。井谷先生は大学卒業後、高等学校にて体育教師を務められたご経験をもち、その後京都教育大学に着任され長く教鞭をとられました。6年前に定年退職を迎えられましたが、現在も名誉教授として精力的に研究活動を続けていらっしゃいます。日本の学校体育におけるカリキュラム研究やジェンダー研究を牽引されてきた方で、25年ほど前に日本スポーツとジェンダー学会を立ち上げたメンバーの一人でもあります。フィールドワークやインタビュー等を駆使されながら体育科教育やそのカリキュラムについてジェンダーやセクシュアリティの視点から切り込んでこられ、2025年には大修館書店より「どうして『体育嫌い』なんだろう」という図書も出版されました。また今回のレクチャーとは直接は関係ありませんが、2016年には『子どもの体力向上』をめぐるローカル・ポリティクスの検討」という論文で日本体育学会（当時）の学会賞を受賞されています。今回、そうしたご研究の集大成として貴重なお話を伺えることを楽しみにしています。それではよろしくお願いいいたします。

井谷恵子：ただ今、高峰先生にご紹介いただきましたように、定年退職してもはや6年になります。科研費による研究、学会等の仕事や講演、それに親の介護、趣味などで毎日が結構慌ただしく過ぎているというところです。そんな中で体育とジェンダーについて話をする機会をいただいて、本当にありがとうございます。

配付用資料としてお手元にお届けしましたファイルですが、その後少し修正をしたり、順序の入れ替え等を行っていますので、ご了承ください。

今回、体育とジェンダーという大きなテーマで、切り口は自由にとということでしたが、どこに焦点を当てるかと考えたときに、やはり学校体育と競技スポーツの関係を外せないと考えました。競技スポーツが中心であることで、体育は男性優位な構造になってしまう。逆に体育を競技スポーツからずらすことによって、“明日の”といえますか、未来の体育の新しい、オルタナティブな姿が見えるようにも考えています。

このスライド（p.5）ですが、「女性の休日」という映画、ご存知でしょうか。これは昨年の秋から上映されていまして、今もいくつかの映画館、どちらかと言えば小さな映画館とか自主上映会で観ることができます。この映画は、アイスランド、ジェンダーギャップ指数でこの16年間ずっとトップの国ですが、1975年に全女性の90%が仕事や家事を一斉に休む、つまり、ストライキなんです。それを“女性の休日”と呼んでいます。そのドキュメンタリー映画、一部アニメーションが入ったりはしてますけれども、その日を振り返るドキュメンタリー映画です。

ちょうど1975年から50年、昨年で50年になりました。去年はいろんな意味で節目の年ということでもありました。この映画は日本語版で上映されていて、非常に反響を呼びまして、この

映画をきっかけに日本版の“女性の休日”をやろうじゃないかというプロジェクトが進んでいます。ちょうど3月8日が国際女性デーなんですね。それに合わせて、3月8日だけに限らず何らかのアクションをやりましょうというアクションが今広がっています。映画の上映とトークだけでなく、スタンディングとかデモのようなものもあちこちで企画されているようです。

1. ジェンダー研究、フェミニズムの道(スライド p.2)

今日お話しする内容としまして、7つも並べてしまいましたが、多分後半は時間不足になると思いますので、少し端折りながら皆さんとの意見交換のところで補足することになるだろうというふうに考えています。

まずジェンダー研究、フェミニズムの道ということで(p.3)、私自身の話で恐縮ですが、紹介いただきましたように、当初は高校の保健体育教師をやっていました。その後、大学の方に勤務することになり、その研究の3分の2くらいをジェンダー研究に費やしたということになります。当初は体育科教育学、特にカリキュラム研究をやっています、修論とか博論はジェンダー視点を含みつつ正面からジェンダーの研究というものではありませんでした。なぜジェンダー研究を志すようになったかということですが、やはり自分自身のいろんな経験が大きいですね。教員採用試験の男女格差。私は1954年生まれですから教員採用試験を受けましたのがちょうど1975年ですね。先ほどのアイスランドがストをやったその年ですね。その時はもう本当に男女格差が激しかったです。採用自体にどうもバイアスがかかっているな、女性はダンス要員という、そういう感じもありました。教員数の男女差も大きく、職場でのジェンダー役割もあからさまにというより暗黙のうちに引き受けざるを得ないようなものもありますし、加えて家族でのジェンダー役割、仕事と子育てとに引き裂かれるという状況でした。体育教員というのはどうしても部活動に関わらざるを得なくて、今は週休2日ですけども当時は土曜日は半日でした。午後は当然部活動で、朝練だって平気でやっている時代でした。放課後の部活ってというのは、まあもちろんいろいろな仕事の合間でやりますし、日曜日や休日は試合等々あるという、そういう中でどうやって子育てするの？という、そんな状況に多くの教員、特にその時代ですから、女性の体育教員というのは相当しんどい思いをしながらやってきたという、そういう経験があります。

それから、研究の中でのきっかけは体力づくりとか体づくりなんですけれども、特に体力が政治利用されているという感覚を非常に強く持っていました。いろんな体力にかかわる国や文部科学省等々の文書を見ますと、戦後の発展は国民の体力が基礎になっているというようなことが堂々と書かれています。しかし、考えてみると、あの体力って一体何を測定しているのか、何を目指しているのか、もう一つよくわからない。私は当時アメリカのカリキュラム研究をやっていたんですけども、アメリカでも体力というものが強調される時期が繰り返しあるわけですね。それがやはりアメリカが繰り返してきた戦争の時期というのと重なっている。これは私が在外研究などでお世話になったチャールズ・コービンという、かつてのAAHPERDの会長ですけども、その方からいろんなことを教わりました。そういったことで、体力っていうものを、あるいは体力づくり、体づくりっていうのは、やはりかなり批判的に見ていけないものなんだということ学びました。

そういう経験を通して、体育スポーツに関わる多くの男性主流的な立ち位置、ある意味権力の

ある男性とは、行く道も見える道も異なっているだろうと感じています。スライドのイラストにもあるように、男性はもちろん様々な努力をされているけれども、やはり女性の行く道というのは、垂直の崖を登るといふか、いつでも転がり落ちるような、歩みといふか、そういう道だと感じているということをお伝えしたいと思います。

ジェンダー研究をスタートさせた時、今もなおそうなんですけれども、ジェンダーということをお話にした途端、人々、研究者だけではなくて、一般の人も含めて視線がそれるという経験を繰り返してきました。研究に関しては「もうそういうものはやめた方がいい」という忠告も何度も受けてきました。それでもジェンダー研究を続けてきたのは、ジェンダー研究に体育スポーツのオルタナティブな未来があるということを感じていたからです。

少し体育とジェンダーから離れて(p.4)、フェミニズムとか女性学とかジェンダー研究のことをお話しさせていただきますが、フェミニズムの道も非常にまた厳しいものでした。ここに本当に簡単な年表を並べていますが、世界的に共有されているはずの男女平等ですが、なかなか順調には進んでいません。第1回の世界女性会議がメキシコシティで行われたのが1975年ですね。この年にアイスランドは“女性の休日”をやっているわけです。それから国内外でいくつもの非常に重要な出来事がありました。特に女性会議では、1995年の第4回の北京で行われた女性会議ですね。ここでは北京宣言および行動綱領、これが非常に大きなインパクトを与えています。

日本はというと、女性差別撤廃条約の批准が1985年で、批准したからには、国内法等々を整備していかなければならないわけで、それで雇用機会均等法、それからカリキュラムの男女平等ですね。高校での家庭科の男女必修がここから始まったわけですね、高校では男子が体育の単位が多く、女子は家庭科と体育が半分ずつ。女子だけに家庭科というものが課せられていたのがここから変わりました。1999年には男女共同参画基本法ができ、この元に基本計画が策定されるという状況になっています。

ところが、国内外で男女平等に関わる制度整備が進んできた反面、日本の現実としてはジェンダーギャップ指数が、今なお世界の最低辺にあります。そして、かつてのウーマンリブ、ジェンダー研究、ジェンダーという言葉に対するバッシングも繰り返されてきました。今も女性のモヤモヤと言うと優しすぎる表現ですが、不利益が随分あり、例えば、#MeTooとか#KuTooというようなことが女性の声として注目され、ムーブメントになるということがあります。また、非正規雇用が女性に多いとか、ケア役割の多くを女性が引き受けているという実態があります。ケア役割とケア役割的な仕事ですね。保育士や看護師は、非常に女性の割合が高く、給与も安いという現実があります。育休の男子の取得率ということが話題になることがありますが、やはり多くの女性が仕事も家事も子育てもワンオペでこなしているのが現実です。

こういった動きをきっかけに、今、UN Womenで北京宣言30年にあたって一つの声明と言いますか、コメントがあります。これを紹介します。「30年前、何千人ものフェミニスト活動家と189カ国の政府代表が北京に集まり、ジェンダー平等を実現するための革命的なアジェンダである北京宣言及び行動綱領を全会一致で採択しました。これは今でも、女性と少女の権利を促進する最も先見性のある包括的な枠組みとして世界的に支持されています。」少し飛ばします。「しかし、この歴史的な約束から30年を超える今年(=2025年)、私たちは不愉快な真実に向き合わなければなりません。世界の至るところでジェンダー平等の進展が停滞し、後退すらしています。

暴力的な紛争が拡大し、気候の気候変動、気候危機は悪化、北京行動綱領が解体を目指した力、すなわち家父長制、貧困、暴力、不平等などの力は、現在も存続しているだけではなく、むしろ強まり、権威主義の台頭と不平等の拡大で勢いを得た退行的な政治によって武器化されています。」

こういった歴史についての説明は、いくら時間をかけても足りないのですが、簡単に知っていただくために紹介したいのが、スライドの右側にある MIMOZA WAYS というポスターです。ミモザというのは女性を象徴する花です。この花の名前をつけた演劇が、昨年、一つの作品になりまして、まず京都で上映されました。非常にコミカルで軽妙なタッチで描かれていて、2時間ほどの演劇の中でその歴史を振り返っていくストーリーです。微笑ましく振り返る、わかりやすい演劇になっています。京都公演についてはすでに終わっていますが、オンラインではまだ見ることができます。東京、両国にあるシアターX（カイ）という劇場では、先ほど紹介しました“女性の休日”のさまざまな取り組みと同時期に上演が予定されています。もし関心をお持ちになりましたら、検索をしてみてください。

もう一つは、日本学術会議の公開シンポジウムもちょうど次の土曜日（2月28日）に予定されています(p.6)。日本学術会議でもジェンダー平等などに関するいくつかの報告書とかシンポジウムなど開催されてきました。今回のものは、やはりジェンダー平等が進まない、あるいは後退しているという危機感が表れている「今こそジェンダー主流化を」というタイトルでシンポジウムが予定されています。これもこの機会に紹介させていただければと思います。

2. 体育・スポーツにおけるジェンダー研究 (p.7)

体育・スポーツにおけるジェンダー研究の方に話を移していきたいと思います。

ジェンダー研究について、改めて紹介するのめどうかと迷ったのですが、簡単に紹介します。フェミニズムの中でジェンダーという概念が生まれ、そして理論構築を目指した女性学とかジェンダー研究が発展してきました(p.8)。基本的には、社会的に構築された男らしさ、女らしさを問い直すという意義があり、社会や文化によって構築された性別やセクシュアリティに関する課題をあらゆる領域において分析する学問であると言えます。現在では男性学、それから性的マイノリティーに関する研究もジェンダー研究の中に含まれていると考えていいでしょう。

先ほどの「ジェンダー主流化」という言葉ですけれども、これは1995年の北京宣言行動綱領の中で打ち出された概念で、政策全般に関わるすべての領域、政策分野にジェンダーの視点を入れていくという意味で、その中でジェンダー平等を進めていこうという考え方です。新しいものとしてはSDGsがありますが、17のターゲットの5番目に「ジェンダー平等」があります。ここでジェンダー平等が重視されているのは、どのターゲットの達成にもジェンダー平等が非常に重要な関わりをしていて、不可欠な視点であるということです。

このような背景の中で「日本スポーツとジェンダー学会」を立ち上げました(p.9)。数年の研究活動を経て、2002年に発足しました。この学会の設立の趣旨、一部だけですが、紹介させていただきますと、「スポーツの振興が、個人や社会の健康・教育・福祉・経済を考える上で、必要不可欠な政策課題とされているにもかかわらず、スポーツ界には性による差別が強く残り、とりわけ、女性にとって不平等・不公平が多くみられます。・・・社会変革を推進するには、変革を促進するための条約や法令、理論構築、草の根運動の三つが必要」であり、「スポーツにおける男女平等・

公平を推進する運動、それを牽引する理論構築はまだ不十分な現状」であるという認識でした。こういった問題意識を設立の趣旨としています。私たちの問題意識にあったのは、体育やスポーツの世界に国際的には非常に強く吹いてきたフェミニズムの風が吹かない、ジェンダー研究の風も吹かないのはなぜなのかということです。1990年代には、私や仲間たちが女性とスポーツ、あるいは私は体育カリキュラムの研究等で欧米へたびたび出かけたのですが、体育・スポーツ研究に障害、そしてジェンダー、人種、エスニシティなどの観点が当然のようにあったわけですね。しかし、なかなか日本の体育・スポーツ研究にはそれが現れてこないということを強く感じていました。研究誌の他、学会員中心に編集した出版物を紹介しています。

少し脱線するのですが(p.10)、冬季オリンピックがまもなく閉会式です。ちょうど日本スポーツとジェンダー学会を設立した2002年には、「スポーツのジェンダー研究を展望する」というパネルディスカッションを行いました。そこで登壇された阿部潔さん、皆さんよくご存じだと思いますが、その阿部さんがソルトレーク五輪の開会式におけるナショナルリティとジェンダーということでスピーチされました。それを振り返ってみると、阿部さんが指摘された状況は今もあまり変わらず、同じ状況が繰り返されていると感じます。

この設立記念の研究会が2002年の6月か7月あたりだったのですが、その同じ年にソルトレークシティでのオリンピックが開催されました。その前年が「9.11テロ」が起こった年でした。冬季五輪の開会式で描かれたのはテロに屈しないアメリカというものを賛美する中で、そういう強い国というものが非常にマッチョに、男性的なものとして描かれる、登場してきたものが、西部開拓者のたくましい男と、そして仲間との連帯が強く描き出されました。最終ランナーが映画化もされた「ミラクル・オン・アイス」を成し遂げたアイスホッケーチームの選手たちでした。ここで阿部さんがジェンダー視点から指摘されたことは、セレモニーでは力強くたくましい男だけが描かれて、女性の姿というのは完全に排除されていたという点でした。そういうことを思い出しながら、やはり体育・スポーツの男性性というのは、政治的な欲望でもあり、そしてそれは今も変わらない、むしろ強化されつつあるかもしれず、体育も少なからず影響を受けているということを感じます。

その事例として現在の動きをいくつか紹介しますと(p.11)、例えば、昨年、東京で行われた世界陸上ですが、主催するワールドアスレックスが、女子選手に遺伝子検査を義務付けました。これは廃止していた性別確認検査をまた再開するということです。日本陸連はそれに先立って人権ポリシーを策定してはいるのですが、なかなか世界陸連に抵抗できない、という状況があらわになったと感じています。今後、オリンピックも同様の動きをするのではないかと推測しています。

スポーツ庁のガバナンスコードについては、一時的には、関係者が精力的に努力されたと思うのですが、いつの間にか女性理事割合40%達成の期限や達成できない場合のペナルティーなどがなくなっています。後退しているわけです。加盟団体の実情を考えると、トップだけ、見えるところだけ女性比率を上げようとしても、ローカルなところの代表の女性を増やさないと比率が上がってこないという現実があります。ところが、ローカルへの働きかけが弱いのか、意識がないのか、不明ですが、結局、上位組織の見えるところだけの変化になっているように見えます。トップの目立つところだけ、言わば都合の良い「わかまえる」女性を起用していくという状況で、その結果、「やっぱり無理です」という結果の反映だと思います。

もう一つ注視したいのが、「すべての女性の安心・安全と女子スポーツの公平性等を守る議員連盟」というのが2023年に発足しています。今の政局を考えると、どういう動きをするのか非常に気になるころではあります。で、政治的な動きが女子スポーツやスポーツ界全体に響いてくる。アメリカの右派政権、トランプの主張に同調するような動きが目立っているということです。

3. 理論的背景と研究の現実(p.12)

次に理論的背景と研究の現実ということで、一つの研究を紹介させていただこうと思います。

これは『よくわかるスポーツとジェンダー』という本です(p.13)。これは会員中心に執筆しており、私も執筆者の一人ですが、中心になって編集された飯田さんの言葉を紹介しようと思います。「スポーツへの女性の参入はジェンダーの挑戦の歴史でもありました。しかし、より速く、より高く、そしてより強くという枠組みの中では、スポーツは男女間の差異化、つまりジェンダーを再生産し続けることとなります」という語りから始まっています。本書で扱われた研究の分野ですけれども、右側にリストしていますように、基礎理論、歴史、教育、メディア、スポーツ政策、スポーツ組織、スポーツ倫理、スポーツイベント、身体、セクシャルマイノリティ、多様性、研究・学術、こういった多面的な分野から構成されていますし、これ以外にもいろいろな切り口があるだろうと考えています。日本スポーツとジェンダー学会の会員それほど多いわけではありませんで、全ての領域に十分な研究蓄積があるわけではなく、多くの方々に参画いただきながら研究蓄積を進めているところです。

ここで体育については、「教育」の中で扱っています。教育とジェンダー、特に私たちが注目するのは体育とジェンダーですが、教育の一分野と考えますと、批判的教育研究を外せません(p.14)。批判的教育学という分野があります。これはアップルとか、古くはパウロ・フレイレたちの研究ですが、大雑把に言いますと、「何が『公式の』あるいは正統とされる知識とみなされ、誰がそれを所有しているのかという問いのもとにある認識論的・イデオロギー的前提を根本から変革する作業である」ということとなります。これはもう少しわかりやすく、スポーツの例で言いますと、例えば「スポーツは民主的で誰にとってもフェアで正義である」「スポーツが常に善である」といった公式の知を問い直し、周縁化され不可視化される人々の経験や声を聞き取り、体育を再検討する、ということになるかと思います。

批判的教育学の牽引者であるアップルは、「我々は、現実世界をつねに社会の底辺を生きる人々の立ち位置から眺め、彼らが置かれた抑圧的な諸条件を再生産するイデオロギー的・制度過程や形態に根底から再構築するに至る多くの批判的知見や理論を生み出してもきた」と述べています。つまり、研究を進めるにあたって、私たちの視線はいったいどこにあるのか、立ち位置はどこにあるのかということをお問うているわけです。

このように、体育とジェンダー研究の背景を考えますと(p.15)、一つは女性学、フェミニズム理論であり、中でもフェミニズムの教育思想、ペダゴジー、実践学といえますかね、この中で特にベル・フックスの研究が近年注目されています。

もう一つが、先ほど紹介しました批判的教育研究です。この理念というのは、先程アップルの主張を紹介しましたが、周縁化される、周辺化される人々の声を聞き取っていくことが中心課題になります。そして研究方法としては、やはり量的・数量的な手法によって見過ごされてきた、あ

るいは排除されてきた存在への注目です。そうしますと、必然的に、質的研究に焦点があり、多用されることとなります。参与観察、エスノグラフィー、言説分析、インタビュー、そういった手法が多く見られます。スライドの下に2冊の本を紹介していますが、ベル・フックス、この方はアフリカ系アメリカ人のフェミニストであり、研究者であり、活動家でもあります。ここで重要なことはジェンダー研究、この複数の立ち位置というのは、ジェンダー研究あるいは女性学というものが常にやはり白人の女性、場合によっては白人の知識人を中心に進められてきたのではないかという批判です。同じ女性であっても、黒人女性と白人女性は違う。そして白人女性の中でも、やはり貧困、経済格差もある。人は、様々な属性を生きていて、これをインターセクショナルリティというわけですが、その交差の中にあるわけで、一つのカテゴリーとして「女性は」、あるいは「男性は」とは言えない。そういう意味でブラックフェミニズムという、多様性に目を向けることを推進してきた人でもあります。関心を持たれましたら、こういった書物も手に取っていただければと思っています。

そして、日本国内のもので幾つか、これだけは紹介しておかないとなと思っていますのが、一つは『学校文化とジェンダー』という木村涼子さんの本です(p.16)。教育とジェンダーに関わる出版物は本当にたくさん出ています。その中で、この『学校文化とジェンダー』は、やはりバイブル的なものです。例えば、隠れたカリキュラム、これはヒドゥンカリキュラムとして海外から入ってきたものですが、これを広く私たちが知ることになり、そして学校の中で男らしさ、女らしさ、ジェンダーの再生産がなされている、平等だと思っている学校の中で再生産がされているということを明らかにした、そういう出版物でもあります。

新しいものとして今年出版されたもので、『学校の「男性性」を問う 教室の「あたりまえ」をほぐす理論と実践』を示したいと思います。これは多くの方の手によって書かれている本ですが、「学校は男女平等に見えて、実際には男性を標準とし、『良いこと、目指すべきこと』とされる基準の多くが男性性と結びついている。しかし、教師はそれを意識することなく、当たり前前に受け入れていないだろうか。学校で日々行っていることの多くが、日本のジェンダー不平等の大きな原因なのかもしれない。学校の日常をジェンダーの視点から問い直す」ということです。こういう本が今年出されたというところから、教育とジェンダーが何をみつめてきたかということがわかるものです。

いくつもの出版物もありますし、蓄積は非常に多いわけですが、やはり重要なことは、学校は一見男女平等に見えて、実際には多くのジェンダー課題が今もなお残存したままなのだということです。

ここから少し話が変わるのですが(p.17)、今まで話してきましたような理論的背景をもとに展開している体育とジェンダーに関して、体育科教育学研究はどんな状況なのかということ、一つの研究プロジェクトの結果から簡単に紹介させていただきます。

見ていただいているスライドは、今から3年ほど前に日本スポーツジェンダー学会の研究プロジェクトとして、高峰さんが中心になって進められてきたものです。体育・スポーツ科学の諸領域の研究成果において、性別や性差がどのように扱われているかを把握しようということで(p.18)、「体育学研究」「体力科学」「発育発達研究」「スポーツ心理学研究」「スポーツ社会学研究」「体育科教育学研究」「生涯スポーツ研究」という7誌を取り上げて、10年間に発行された論文を分析

しました。

これをどのように分析したのかを説明していると時間がかかりますので、私が担当しました体育科教育学の結果だけを紹介したいと思います(p.19)。一点目は、数量的データを使った論文が非常に多く、ここでは質的量的合わせた複合的な研究が多いのですが、特に技能評価が多いということです。中でも運動領域を見ますと「陸上運動系」のものが突出して多いのです。一方、学習指導要領をご存じだと思いますけれども、技能というのは目標のごく一部になっているわけですね。思考力、判断力、表現力とか、学びに向かう力、人間性等とか、そこらあたりが近年の学習指導要領の焦点にはなっているのですが、このように技能を測る、それで体育の成果を測るという手法が多い。懸念しますのは、技能は他の側面に比べて評価しやすく、数量的な測定が可能で、客観的に捉えやすいということがあると思うのですが、運動領域の多くが競争的なスポーツですし、男女差が明確に出やすい。これは競技スポーツが持つ特性で、後で話をさせていただきたいと思います。こういう研究が繰り返し提示されることによる、男性優位が視覚化される、明示化されるということ、そして、体育科教育とは一体何を目的としているのか、科学的研究とは何かということ問い直す、そういう必要性が感じられるということです。

特にジェンダー視点から問題と思われる一例として(p.20)、ジェンダーステレオタイプを強化する解釈です。これは研究だけでなく、結構見られるように思います。例えば、あるデータを基にして、「したがって、男子に対しては、『できないところを教えあって、みんなができるようになりたい』という『集団思考』への働きかけが、女子に対しては『少し難しくても、面白い運動をしたい』という『充実志向』への働きかけが、それぞれ重要であることが示唆される」という考察です。これは、男子、女子をそれぞれ一つのカテゴリーでまとめてしまっているわけですね。それぞれの集団内の多様性を無視することになり、運動着で言えば男子には一律Lサイズを着せて、女子には一律Sサイズを着せる、笑い話ですけども、こういうことが研究で起こっているのです。確かに平均値の差はあるけれども、そのそれぞれのカテゴリーの中の分布、差異は非常に大きいということが無視されているのです。

体育科教育学研究の分析結果からの問題提起としてまとめたものが21枚目のスライドです。重要どころだけ説明すると、身体的な性差、生物学的性差と社会的な性差ジェンダーへの認識は非常に薄いということです。

少し飛ばしますけれども、教育は性差医学などの生物学的性差が強く関与する学術領域とは性質が異なります。教育というのは社会的に形成されていくわけですから。その理解がやはりまだまだ不足しているということです。男女差の記載だけで放り出しておくと、そのことによって男女差があると認識を定着させることに加担することになります。ですから、男女差というものに対する解釈には慎重な記述が必要ということになります。体育科教育学についてのジェンダー視点からの分析結果でしたが、説明不足のところがありますので、他分野の研究誌の分析も併せて公表されていますので、ぜひ見ていただければと思います。

4. 中心問題としての競技スポーツ(p.22)

ちょっと急ぎながら進めますが、これまでお話ししてきたことを踏まえて、中心問題であり一番重要と捉えているのが、体育と競技スポーツとの関係性です。

戦後のカリキュラムは、民主的な教育手段として競技スポーツ、スポーツ中心カリキュラムへ変化しました(p.23)。しかし、そこにジェンダーの視点が欠けていました。1989年の改定まで、男女で異なるカリキュラムがあり、男女で異なる単位数、内容についても武道・ダンスの差異がありました。男女平等カリキュラムが実現しているはずの今でさえ、実態としては男女で異なるカリキュラムが継続しているのです。これは、実は重大なことで、大半の子どもたちが小学校から高校まで12年間、必修の科目として保健体育があるわけですが、それに加えて体育行事があり、運動部活動がある。そこで子どもたちが学び取るもののインパクトが非常に大きいということに私たちは目を向けないといけないと思います。カリキュラムだけでなく、教師、指導者、運動、部活動、それに伴うルールであったり、スペースの配分であったり、性別二元制などが当たり前のように踏襲される、そういったものが非常に影響を与えているのではないかと考えています。

その意味で、体育は構造的に男性優位な教科・科目であると考えています(p.24)。特に競技スポーツから離れられない、学校体育の構造的な問題があります。このことについては、ここにいらっしゃる皆さんは、近代スポーツの発祥、発展について改めて私が説明するまでもないと思いますが、そこにジェンダー視点から見た課題があり、先ほど申し上げたような競技スポーツ中心のカリキュラム、運動部活と学校行事が横たわっています。競技スポーツを疑わない学校と社会の構造というものがあるということです。簡単にこのことについて説明を加えたいと思います。

近代スポーツをジェンダー、セクシャリティの視点で見ますと(p.25)、一つは「競争原理」。近代スポーツは競技とは言え、競争という特質を持っており、勝者となることで、序列の上位にあることを目指す文化です。「より速く、より高く、より強く」ということです。公平な競争のために、ルールの標準化や記録化、組織化などが備えられてきたわけです。近代スポーツの発祥自体はエリート男性の教育として誕生しており、多くの競技種目のパフォーマンスが体格や筋肉量に支配され、逆に脂肪量は排除すべき余分な荷物になっているという性質があります。近代スポーツはこういった文化の特徴を受けて、ジェンダー規範、男らしさ規範が根深いということ指摘できると思います。同時に、シスジェンダー（生物学的性別と性自認が一致している）、ヘテロセクシュアル（異性愛）規範も備えています。ジェンダー、セクシャリティの視点から見ると、こういう特徴を近代スポーツが備えていると考えられます。

これは私が指導していましたときに、ある男子学生の言い分なのですが、よく見られる意見です(p.26)。「女性の体育スポーツ指導者を増やすにはどうしたらいい？」という問いかけで、議論した結果なのですが、学部生の段階では、こういう意見が結構多く見られます。「女性のスポーツ指導者が少ない理由に、男性と比べると運動能力に劣る種目が多いことが挙げられる。指導者の見せる見本が大切で、それによって生徒は感動する。」こういうことを書いてくる男子学生が多いのです。現在はかなり変化しているかもしれませんが、学校体育イコール競技スポーツで、視点は「できること」「技能」に偏り、男性中心の思考が強くあるわけです。一方で、男性にできないことというのはあまり視野にはないという面があります。このような意見をきっかけにして、もう少しジェンダーを考える場を作ることができたのにと、今になると非常に残念に思っています。その後、この学生がどの程度理解を進めたのか興味深いところです。

このスライドは、競技スポーツの特質を批判的に捉えたものですが、これまで多用しているも

のなので割愛しながら進めようと思います(p.27)。スポーツというものが、特に自然との対話、遊び、そして自由なルールというものを、人対人、集団対集団、国対国の競争へと変容させている側面というものを指摘できるだろうと考えています。近年、オリンピック種目として追加された競技を考えていただけるとわかるかと思います。これがいくつも種目が増えて拡大しているというのが現状でしょう。

子どものスポーツもそうですね(p.28)。子どもの素朴な遊びが競技化してくるという状況が生まれています。縄跳びもそうですし、パルクールのようなものであって、街中の遊びだったと思います。ブレイキンだってそうです。それらが逆に競技スポーツとして、小学生にまで浸透していく。京都では大文字駅伝というものがありません。これはいろいろ批判もあり、問題もあって、2013年に休止しているという状況です。

こういうふうに説明しますと(p.29)、多くの方、特に体育科教育に携わっている方、研究者の方々は「競技スポーツ中心というけれども、今のカリキュラムは違うよ」って反論されます。確かに学習指導要領で示されたカリキュラムでは競技スポーツ中心ではありません。学習指導要領では、競技スポーツというのは運動領域として示されているものに過ぎないです。より上位にあるものは、知識及び運動思考力、判断力、表現力、学びに向かう力、人間性、このところにあるわけです。これらの目標のために運動領域を教材にしながら学習を進めているという構造です。ところが、実際にはそうではないことが起こっています。体育の目的というのは豊かなスポーツライフの実現、これはずっと変わらないわけですね。新しい教育課程で、主体的、対話的で深い学びとかいうものが強調されても、学校の、例えば体育教員がいる体育準備室のようなところに掲げられている年間計画なんかを見ると、スポーツ種目がずらりと並んでいるわけですね。例えば1学期や前期は体づくり運動とか、場合によっては集団行動なんていうのが並んでいたり、そのほかにも球技や陸上競技など競技スポーツの種目名が並んでいます。

結局、カリキュラムといっても「制度化されるカリキュラム」と、実際に「実施されるカリキュラム」、そして「学習者によって経験されるカリキュラム」があるということです(p.30)。学習者は、自分たちが受けた授業、先生の言葉、学習者と学習者間の相互のやりとりの中で学び取っていくわけですが、先ほどのジェンダーの再生産、子どもたちはジェンダーの差異化を学んでいるということを申し上げましたけれども、結局、子どもたちはそういう授業の中で学んでいるということです。そうすると、制度をいくら変えても、現実の実践が変わっていかなければ、学びというものは変わらないということになります。

カリキュラムというのは非常に大きな概念(p.31)ですので、カリキュラムとしては、それ以外の、体育教員のアンバランスとか、特に中学、高校では、教員が地域のスポーツ振興を担っているというところも問題でしょう。地域のスポーツ振興専門のスタッフなんていうのは、どこの地方行政を見てもそんなに豊富にはいないわけですね。そういうところを二重に担っている教員の存在です。また、学校は特色ある学校づくりとか、ブランド化とか広報活動でこういった競技スポーツを盛んに使います。また評価基準の客観性ということが強調されたりもします。そうすると、どうしても技能とか知識という数量化しやすいものに傾きます。加えて、生徒指導、集団指導要員としての体育教師というものの存在、これも無視できません。先ほど紹介しました『学校の男性性を問う』という出版物で、編著者のお一人の前川さんが述べておられますが、『『指導力』

という名の教員の『暴力』－男性支配への合意を調達する仕組み」だと。これがイコール体育教員というわけではないですが、多くを担っている現状があります。一方で、対極としてのケア役割、学校保健、これを女性教員が担ったり、体育教員の中でもかなりシニアというか、ベテランの先生が担ったりという状況があります。こういったことが結局、教員の責任というよりも、学校を社会全体のシステムとして動いていってしまっているという面が見てとれるわけです。

つまり、競技スポーツを疑わないというか、積極的に利用していく学校文化というものが存在するのです(p.32)。そこにはメディアも関係するでしょうし、この辺りは社会学専門の先生方にお任せする方が良いでしょう、スポーツ組織の思惑もあるでしょう、地域、親、家族の願いのようなものもあるでしょう。こういう中に学校があり、学校体育があるということになります。

5. 事例としての「体育嫌い」の研究(p.33)

時間がもうそろそろというところなので、もうあとは端折って簡単に済ませたいと思います。事例としての体育嫌いの研究ですが(p.34)、最初に紹介していただいた『どうして「体育嫌い」なんだろう』という本の中に書いておられますので、また関心がおありになる方は手に取っていただければと思います。

こういう体育嫌いの研究を始めたそのきっかけというか、動機についてだけ少し話をさせていただきます。

これまでの体育嫌い、スポーツ嫌い、運動嫌い、いろいろな言葉で表現されていますけれども、そういう研究は、男女差をはっきり示しています(p.35)。ところが、その男女差が自明視されている。ジェンダー研究、セクシュアリティから考えると切り込み方が足りないと考えるわけです。先行研究では、能力主義とか指導者の問題を指摘しているものが多かったように思います。一番違和感を持ったのはその次のスライドで説明しようと思いますが、体育嫌いの男女差の究明は、これまでの数量的な研究ではやはり外れてしまう。これまでの研究では、検討する対象から外れてしまうと考える、当事者へのフォーカスグループインタビュー等を中心に質的研究を進めたわけです。

この研究の動機として、こういうこともありました。第2期のスポーツ基本計画でスポーツ嫌いの割合を半減しようという目標が立てられました(p.36)。ところが、その期間中にスポーツ嫌いの割合が逆に増加してしまう。その評価文書で、好き嫌いというのは、コントロールすることが極めて困難な指標であり、教育政策以外の要因が強く関連しているという、そういう評価コメントを目にしたわけです。第3期ではスポーツ嫌いを減らす目標がなくなっていました。私たちはむしろ逆で、教育政策が強く体育嫌いに影響している、そこには競技スポーツというキーワードがあるわけですが、そこに焦点を絞って研究を進めたということになります。

(*ここでは「スポーツ嫌い」「体育嫌い」の概念の説明が不十分になっているので、「体育嫌い」とジェンダー・セクシュアリティに関するリーフレットなどを参照願います。

<https://sites.google.com/view/pegp/報告書リーフレット他>

「体育嫌いの声」などの説明は省略させていただきます(p.37)。

結局のところ、学校体育で不可視化されているものは、ジェンダーの再生産であり、スポーツの

矮小化、競技スポーツへの焦点化などだろうと考えています(p.38)。スポーツはもっと幅広い概念であるはずが、競技スポーツに焦点化されてしまう学校体育というものがある。そしてシスジェンダー・ヘテロセクシュアル規範が当たり前のように学校体育の中に埋め込まれて、そこから外れる人達を周縁化し、その人々の生きづらさを生み出しているという、そういうことが明らかになったのが研究成果だと考えています。

これらはいくつかの小冊子や出版物にまとめています(p.39)。特にこれらの研究では、現実を変革するという意識、特にジェンダー研究の場合は、現実的な問題点、現実を変えていこうという認識があるわけで、私たち研究者はそこに立ち戻っていかなければなりません。その意味では、これらはわかりやすく最前線に届ける使命感といいますか、体育に関わっている方々、体育の指導者であったり、あるいは大学生、体育教員、指導者を目指す大学生をターゲットにしてまとめた小冊子、そして出版物です。

6. ジェンダー視点で考えるときに理解しておきたいこと(p.40)

「課題、理解しておきたいこと」(p.41)、この部分は、先ほど簡単に説明しましたので、インターセクショナリティ、非常に重要な概念ですが、見ていただくだけにしたいと思います。「真逆の実践」(p.42)についても、また何かの機会に紹介したいと思います。

「体育カリキュラムに再考のために」(p.43)、これは本当に大きなものを羅列しています。私自身の見解ということになりますが、学校体育全体に競技スポーツの特性が染み込み過ぎているのではないかという問題意識です。体育はイコール競技スポーツを学ぶことではないはずで、競争原理を疑う、男性の目線、男性中心の基準を見直す、強固な性別二元制を見直す、身体の主体性を回復する、科学の責務と発信、これは実践を変える責任という意味ですが、こういったところでは。

以上で、ひとまず私の発表はここで終わらせていただきたいと思います。

高峰：井谷先生、ありがとうございます。国際的な女性のムーブメントの話から始まりまして、徐々にジェンダー研究、そして体育・スポーツとジェンダー研究という形で展開していただきました。その中で、先生の中心的な課題といいますか、問題意識としての競技スポーツですね。体育のカリキュラムの中における競技スポーツ、そこが一つのポイントになっているのではないかという概要だったかと思います。非常に興味深く伺いました。ありがとうございます。

それでは、残り時間45分ほどありますので、基本的には多くの方と意見交換をして、その中でお話しが十分でない部分がありましたら、補足的にお話ししていただきたいと思います。今日は小学校や中学校の先生もいらっしゃるようですので、ぜひ現場の先生方からもいろいろと現場のご事情等々を伺いたと思います。それでは、ご自由に質問をお出しください。

皆さんが考えていらっしゃる間に私から一点伺いたいの、競技スポーツが学校体育のカリキュラムの中心課題、中心教材になっていて、競技スポーツをするということが、特に高校になるとそれが目的化してるといえるのは、高校を卒業した大学生の授業しながら薄々感じてることなんです。井谷先生のこの見解は、例えばスポーツとジェンダー学会なんかでもこれまでお話しいただいていて、それに対してその競技スポーツだけの問題ではないのではというような意見も出て

たと思うんですね。要は、ダンスであっても競争的にやったり、性別二元的に扱えば結局同じではないか。つまりダンスとか競技スポーツというよりは、教材の使い方、授業展開の仕方なんじゃないかという意見もあるのではないかと思うのですが、それについてはいかがでしょうか。

井谷：はい。おっしゃる通りだと思います。象徴的に競技スポーツという、競技スポーツというものがあまりにも重視されているということを理解していただくために、競技スポーツということを通じてのわけですけれども、基本的にはやはり競技化といいますか、競争というか、そういうものが強調されすぎということだと思います。ダンスもいろんなダンスっていうものがあるわけですが、やはり今ダンスっていうとブレイキンのようなものを皆さん思い浮かべられる、そういう競争にしていってしまうということがありますね。今ちょっと思い出したのですが、佐藤学さんという教育学者いらっしゃいますよね。あの方がおっしゃっていたのは、例えば歌うっていう合唱ですね。合唱であっても同じなのだ。歌うということの楽しさっていうのは、別に競技でもコンクールでも何でもない。だけど、学校の中ではコンクールで勝つことというのが非常に重視されてしまう。本当はみんなとコーラスをして歌うことの楽しさというものがあるはずなのに、なぜそれがやっぱり競争というものに変容してしまうのだろうかということを言われていました。佐藤学さんは結構、体育に関わる、身体に関わることもよく発言されていて、水泳なんかもそうですね。泳法というものが、かつては顔を上げて目を守りながら泳ぐということが中心だったものが、近代泳法というのは速く泳ぐということのために泳法すら変わってきている。佐藤さんは漁師町、海辺で育ったということで、命を守る泳ぎっていうのは卓越していたのだけれども、競技スポーツという面ではなかなかうまくいかなかったというようなことをおっしゃっていて。ある意味、もっと幅広いものがあるにもかかわらず、あまりに競争原理が幅を利かせすぎている学校というもの、競技スポーツが悪いというよりも競技スポーツは幅広い運動・スポーツの一つであるにもかかわらず、競争原理が幅を利かすというところに問題があるのだろうかというふうに考えています。

高峰：はい、ありがとうございます。これで理解が深まるのではと思います。スライドの25枚目に「近代スポーツをジェンダー・セクシュアリティの視点で見ると…」ということで4つの項目、競争原理が1つ目、2番目が男性優位、3番目がジェンダー規範、男らしき規範の根強さ、4番目にシスジェンダー・ヘテロセクシュアル規範が挙がっていて、つまりこの性質ということなんですね。それらが競技スポーツに含まれ、体育の中で使われていく。ですので、競技スポーツでなくてもこのような性質が前面に出ると、それは競技スポーツと変わらないと受け止めました。どうもありがとうございます。その他いかがでしょうか。せっかくの機会ですので、どんどん質問を出してください。

常行泰子：すみません、常行ですけれども。いいでしょうか。

高峰：どうぞお願いします。

常行：はい。井谷先生、すごく興味深いお話、本当にありがとうございました。私自身も一応認識している性は女性で、これまで先生が先ほど講義してくださったその経験として、女性であることがディスアドバンテージになるような体験も、先生が経験したことと似たようなことも、も

ちろん経験をしてくれているんですが、ただ日本というある意味文化が成熟しつつあるのか、そういった一定の先進国に生まれて、今日本のリーダーとして、その政治の中でも女性がトップの立場で高市首相のように誕生する時代になって、その教育的なところだけでなく、政治のその影響といたしますか、そのジェンダー、女性であってもリーダーシップをとりながら、フォローもしながら国を進めていくというような時代において、何かその影響といたしますか、小さい子どもたちとか児童生徒の学校体育、学校教育の中に、そういった女性のリーダーが活躍する政治的なものっていうのは、この先生、日本の場合っていうのは今後どういうふうな展開になるのか、もし先生の知見がありましたら教えていただけたらと思います。

井谷：ありがとうございます。一番難しい質問ですね。難しいと言いますか、どう答えるかなとか考えてるんですけども、確かに女性の首相、総理大臣が誕生したことで、確実に日本のジェンダーギャップ指数と言いますかね、順位は上がると思います。しかし、女性が増えるというだけかね、フェミニズムの目標ではないと言いますか、やっぱりその女性が一体どういう考えを持ち進めていくか、どういう政策を進めていくかということが重要なので、数としては増えるかもしれないけれども、私は逆に高市さんの掲げているいろんな政策といたしますか、関わってこられた今までの発言とを考えると、ちょっと心配かというふうに思っています。誰かご意見あったらぜひお願いします。あんまり正面切ってダメって言いにくいのですが、私は危惧しています。

(*意見交換の中では紹介できなかったが、上野千鶴子さんの意見が参考になるかと思えます。月刊誌「世界」に掲載された記事ですが、現在「ウィメンズ アクション ネットワーク (WAN)」のページに掲載されています。<https://wan.or.jp/article/show/12241>)

常行：はい、ありがとうございます。

高峰：ありがとうございました。続いてその他いかがでしょうか。清水先生お願いします。

清水論：先生ありがとうございました。一つ思っていることは、98年の学習指導要領で“からだ気づき”が横浜国立大学の高橋和子先生やダンス関係の先生たちによって、「自分のからだに気づく」、そういう運動を通して学習指導要領の中に入ったことがあったわけですが、先生の資料にも「身体の主体性を回復する」ということが最後に書かれています。あの時になんでうまく浸透しなかったのかということにすごく疑問をもって、「体育的なもの」と言いますか、からだを大きく動かして、元気を出して、みんなと一緒にやるんだっていうような、何かそういうものが体育なんだという考え方に対して、自らのからだに気づくということは、うまく浸透しなかったように思いますし、そこに大きな問題もあるんじゃないかなと思っています。井谷先生は、そういうからだ気づきやからだほぐしという運動がうまく浸透しなかったということについてどのようにお考えかなと思っています。いかがでしょうか。

井谷：ありがとうございます。からだ気づきについては、結構重要なものだったと思っています。もし今それが本当に実践されなくなっているとしたら、すごく残念なことだなと思っています。結局、からだ気づきというものを本当に重要性がわかって、そしてそれを実践したのは一体誰だったかということですね。逆に、それを重要に思わなかったのは誰で、その人達は結局それをやらなかった。その結果が今あるんだろうって思っています。そうしますと、からだ気づきの運

動を推進していく側の指導者、体育教師、小学校の教員もあるかもしれませんが、そこにやはり、これまでの体育観といいますかね、やはりたくましくて、大きく体を動かしてみんなで頑張ろうってというような、そういった体育観をもうごく当たり前と捉えられる人たちが主流であり、その中で徐々に外されていったというかね、そういう部分はあるのかなというふうには思います。私も今日もスライドの1枚には入っていますが、教員養成大学でしたから学生は体育必修なんですね。生涯スポーツ実習という科目で、全学生、体育は必修です。そうすると「もう大学生になってまで、どうして体育あるの？」という顔で授業に来る学生が結構います。大半は女性です。そういう学生に私はフィットネスの授業というのをやっていたのですが、そこで強調していたことは「うまくなろうと思わなくていい」そして、「人と比べなくていい」「自分のからだ対話しなさい」と。自分の体がどう動き、変化していくのかということを含め、もう一度感じながら運動しようってということで、授業を進めていきました。そうすると、学生たちの顔が上がってくるということを実感してきました。からだ気づきを本当に必要として、そこで自分のからだというものを気づく人たちが一定数はいるんで、逆にそれ気づかないからいいんではなくて、もっと自分のからだというものをもう一度捉え直す機会になったのではないかと思うわけです。今、そういう実践が少なくなっているというのは、繰り返しですけれども、本当に残念だなと思っています。すいません、答えになっているでしょうか。

清水：何かこう、先生も言われたような旧来のスポーツ主流というか、そういうものではない方向からもう一回を捉え直すということが体育の中にやっぱり必要なんじゃないかなと思っています。それを、誰がどうやってやるかというところをやっぱり考えていきたいなというふうに思っているところです。先生、ありがとうございました。

井谷：ちょっと付け加えますと、体育科教育に関わる原理、思想といいますか、そういうものは結構、初期の頃といいますか、戦後間もなく、あるいは30年代とか盛んにあったと記憶しています。ところが今はそれがなくなってというのがもう大問題なのです。つまり、体育という教科・科目は一体何なのか、何を学ぶのか、学ばせるのかというところの議論が、今、本当に貧弱だなと感じています。まあ、それはそれでかつての議論もジェンダー視点がない、乏しいという問題はあるんですが、付け加えさせていただきありがとうございます。

清水：私もそういうふうに思っています。ありがとうございます。

井谷：ありがとうございます。

高峰：北原さんお願いします。

北原和明：岡山理科大学の北原と申します。よろしく申し上げます。今日のお話を伺ってですね、誤解のないように最初に申し上げますと、本当に共感的に聞かせていただきました。私も生涯体育、スポーツと、現在の学習指導要領の内容のねじれというのは課題に感じてまして、常日頃学生とも話を話しているんですけども、一方でですね、私個人的なことなんですけどもダブルダッチの普及に長年携わってきまして、20年前、当初マイナースポーツだったダブルダッチがですね、今、協会としてはオリンピック種目の昇格を目指してらっしゃるっていう中に関わっているんですね。で、これからこう、体育観っていうのが大きく変わっていく中で、なぜ変わらないのかっていうことを考えるときに、やっぱり今日的に言うと「半分合ってる半分間違ってる」ではないですけ

れども、やっぱり今の現状が間違いだという考えがあるのに対してですね、これまでやってきたことを是とするような勢力というんですかね、そういう考え方もあると思うんですね。私も実際そういう人たちと関わっている中で、絶対的にそれを否定するっていうことはしにくいなということを常に考えてるんですけども、逆にですね、今のこの現状を是とする人たちに対して、どういうアプローチを今後していくべきなのか、今まで間違ってるよっていうだけではなくて、何かこの2項対立から脱するような議論が必要なのかなって今考えてるんです。その辺のお考えをお聞かせいただけたらありがたいです。

井谷：はい、ありがとうございます。確かにジェンダー研究、私が今日ざっと述べたことは何か競技スポーツ批判という風に捉えられるかもしれないですね。そうではなくて、その価値体系といますか、何を学んでいくのかということの価値の序列みたいなものをもう一度考え直しましょうということなのです。ただ、これまでの考え方を是とする人に対してどうアプローチをするかというところですが、非常に難しいと思います。例えば、ジェンダーに関わることを学生に対して授業する場合に、理論だけを言っても確かにそうだけど・・・で終わってしまいます。身体の中にも心にもその人に染み込んでいかないわけですね。先程、ベル・フックスっていう人を紹介しましたが、やはりそのなぜダメなのか、どこに問題があるのかというような契機を捉え、何かの問題がある時、何かのきっかけを捉えて、それはなぜかということを手際よく議論していくって、そういう場が本当に必要だと思います。最後に示しましたように、フェミニスト・ペダゴジー、これが一番重要なところだろうと考えています。ただ、単にこれ正しくてあなたがやっていることは間違いだと否定するようなやり方では変わりません。なぜそういうふうを考えるか、それを是正するにはどうしたらいいのか、どんな世界があるのかというようなことを丁寧にみんなで考えていくというところから出発するのだらうと思っています。何か非常に抽象的なことで、ご質問の趣旨に沿ってないかもしれませんが、ジェンダー研究というのは、そういう実践上の問題をこれから耕していけないといけないという課題が確かにあると思います。もし北原先生の方でどうすればいいかということについて、何かヒントがあれば、逆にここで共有していただけたら大変うれしいなと思います。

北原：ありがとうございます。すみません、事情がありまして顔を出せないんですけども。私からの提案というところが具体的にあるわけではないんですけども、何か一つのことへ向かっていくときにそれしか見えなくなってしまうというような現状はあるかと思っています。具体的に私の今抱えてるダブルダッチ、日本ジャンプロープ連合ですけども、そこでの議論の中でも、もちろんオリンピック種目を目指していくっていうことの価値っていうのは認めつつも、それだけではないんだぞっていうところを、本来ダブルダッチや全ての競技種目がそうですけれども、スポーツって何だっていうところを常に追いかけていくような働きかけっていうのは、機会があればしていくべきなのかなと思ってます。ありがとうございます。

井谷：ありがとうございます。私はダブルダッチとかそういう競技的なものをもう全否定する気は全くないのです。そうではないもの、素朴な遊びもあるし、もっと例えばクリエイティブなものって言いますか、創作的なもの、そういうものもあるということです。そういう価値を共有しつつ選び取ったのがダブルダッチであれば、それはそれで一つの方向だろうというふうに考えています。失礼しました。

北原：ありがとうございます。おっしゃる通りだと思います。今回、ジェンダーっていうのはすごく象徴的なところで、よく共感していただきありがとうございます。

高峰：北原さん、ありがとうございます。すみません、北原さんに私から逆に質問してもよろしいでしょうか？先ほどのご質問は、現状を是とする人に対してどういうアプローチがあるかということだったと思いますが、現状を是としない現場の先生方もいらっしゃるって、その先生方は、例えばジェンダーのことについて情報とかをお持ちなんですか。私も最近、現場の体育の先生方と話をする機会が増えてきて、「体育っていろいろジェンダーのことを考えなくちゃいけないよね」という話にはなるんだけど、実際何が問題でどうしたらいいのかわからない、情報がない」というようなことも結構聞くんですね。こうした現状を是としない人たちの状況って何かご存知ですか？

北原：具体的にそういう声があるわけではないんですけども、私も元現場の教員ですので、現場の教員の感覚からすると、今日話題になってるようなことを意図しないというようなことをそもそも考えないんだっていう、もう現場の現状って言いますかね、そもそもこれありきで動いてるっていうところに。そういうのが大多数ではないのかなっていうことなんですよ。ところが、この頃の学生の様子とかも見てましても、確実に価値観っていうのは変わっていますので。これまでの昭和や平成は古いみたいなことを言い出す学生たちは確実に増えてはきてると思うんです。ですからそういった学生達と深い議論をする中で、今までこう言うに言えなかったような声っていうのを拾っていくっていうことはできていくのではないかなっていうふうに思います。

高峰：はい、わかりました。情報ありがとうございます。大変勉強になります。まだお時間ありますけど、他の方いかがでしょうか？清水さんお願いします。

清水克郎：すみません。伺いたいことの一つは学校教育の内申点の問題とジェンダーの関わりのこと、もう一つは生涯スポーツとジェンダーの関わりについて、この二点を伺いたいと思います。

井谷：ここで内申点とジェンダーというのは具体的にどういうご質問でしょうか。ちょっと私の中では理解ができてないですすみません。

清水：例えば公立学校と私立学校で内申点が違う問題は大きいと思いますが、その場合、競技スポーツに特化されることと、やっぱり若い頃から運動能力のある子が抜擢されるということと、私立学校からのスカウトみたいなものもありますし、そういうことが一つ。それからもう一つの生涯スポーツについては、やはり年を取ると体力がだんだん落ちてくるのですが、その中で男性と女性の違いについて伺いたいと思います。

井谷：はい、ありがとうございます。まず、後のご質問の方ですけども、生涯スポーツ、高校卒業以降の運動習慣については、スポーツ庁が「スポーツの実施状況等に関する世論調査」として公表をしています。

(https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukei/chousa04/sports/1415963_00015.htm)

これを見ただくと一目瞭然なんですけれども、とにかく学校を卒業するとみんな途端に運動しなくなります。この1年間に行った運動・スポーツの大半が、歩く、ウォーキング、という状況です。あのデータを見ますと、学校体育って一体何なのか、どういう役に立っているのだろうと考えてしまいます。特にジェンダー視点から言うと、確かに男女差はあります。男性の場合は、

例えばトレーニングとか、ゴルフが出てきたり、女性の場合はヨガや体操のようなものが出てきたりするのですが、いずれにしても運動としてやっているものの大半がもうウォーキングですね。それも日常生活の中でできるだけ歩くという、そんなものです。それが一つです。

それから、説明して下さったのですが、内申点というものの実態がよくわかっていないので、それとジェンダーとの関係と問われても、具体的なイメージが湧きにくいのですけれども、評価という点に置き換えると、やはり技能というようなもので捉えることが多いのではないのでしょうか。しかし、技能というのであれば、おそらく男女別に評価されていると思うので、不平等だということは現実としてはないのではないかと推測します。まだ質問の意味が十分理解できておりません。何かありましたら、もう少し付け加えていただくと、多少でも役に立つことが言えるかもしれません。

清水：はい、ありがとうございました。

高峰：清水さん、よろしいでしょうか。はい、ありがとうございます。永末さん、どうぞお話しください。

永末大輔：ありがとうございます。千葉大学の附属小学校で教員をやっております永末といいます。井谷先生のご講演やお話を別の機会でも聞いて、それから著書をいくつか読ませていただいたんですけど、確かに学校の現状をちょっといろいろ考えなければいけないなというところがまだいっぱいあるなというところで、そのジェンダー的な部分と、いわゆる肉体的な男女差というのをどうバランスよくとっていくのがいいんだろなって。小学校はわりと男女共修が当たり前みたいな中で、だけどやっぱり男女で分かれちゃうところがあるよとか、いや、カリキュラム、種目ベースというか運動領域ベース難しいんだけど、じゃあどうしたらいいんだろなあ、みたいなのがちょっとまだ自分の中で落ちてないで、先生のお考えというか、お話も少し聞きたいなと思って質問させていただきました。よろしくお願ひします。

井谷：ありがとうございます。具体的にどういうものというお尋ねがあれば、少しでも有意義なことが答えられるかなとは思うのですけれど。

永末：例えば男女の身体接触が絡んでくると、高学年になるとどうしたらいいんだろなっているのとか、あと、年間計画、カリキュラムをつくるときに、どうしても種目で言ってしまった方が理解が早いというか、やってもらいやすいみたいな都合というか事情もあって、割と種目で書いてしまうことが多いんですけど、それだとまずいならばどういうふうにやっていったらいいかなという点が、ちょっとまだ自分の中で落ちてないという感じなんですけど。

井谷：はい。やっぱり年間計画を種目で記載するというのは、どうしても運動スペースとか、どの施設を使うかということと関係するので、仕方がない部分もあると思うのですね。ただそれが目的化してしまうというか、前面に出てしまうことによって、そこで何を学ぶのかということが二の次、三の次になってしまうのではないかという懸念があります。

身体接触。これはどうしましょうかね。やっぱり、それが嫌だという声にはちゃんと応えないといけないと思うのですね。場合によっては何らかの工夫をする必要もあるだろうとは思いますが。何でもかんでも一緒にするというのがジェンダーというわけでは決してないので、そのあたりが今まで歴然と当たり前のように男女で分けていたものを、それぞれのニーズとか、やりたいこ

と、そういうもので分けていくということは可能だろうと。たくさんの子どもを相手する中で、複雑なことはなかなか難しいというのはわかるのですが、少なくともこれまであまりにも「男は、女は」ということで、端から性別カテゴリーで分けてしまうという面をもう少し個人差という面でカリキュラムを作り直すと言いますか、集団を考えてみるということはできるんじゃないかなというふうには思います。例えば、こんな工夫があるとか、良い実践がいっぱいあると思うんですよ。小学校の実践を聞いていますと、すごい、こういう実践が進んでいけばいいなというものが、実際いっぱいあります。それはよくわかっているのです。全部を否定するっていうのではなくて、そういったものを共有しながら、今まで固定的に考えていたものをもっと柔軟に組み直していくようなきっかけを作ればといいなと、いうふうに思っています。むしろ共有をしてほしいなっているところです。

永末：一気に全部変えるのはなかなか難しいかもしれないですけど、少しずつちょっと取り組んでいこうかなというのをまた改めて先生のお話を聞いていて感じたので、どこかでまた共有できればうれしいなと思いました。ありがとうございます。

高峰：永末さん、現場の情報をありがとうございます。他にいかがでしょうか。特にございませんか。井谷先生、ご講演の中で、特に後半かなり端折られた部分があって、何かお話し足りないところとか、あと先程最後の方に先生が実際に授業をやられている事例なんかも少し紹介していただいたのですが、そこに私も個人的に興味がありまして。そこに限定しませんが、何か井谷先生から補足的にお話しされたいことがあればお願いします。

井谷：ありがとうございます。そうですね。今、高峰さんから言っていたのは「体育科教育とジェンダーポリティクス：真逆の実践」(スライド 42) というスライドですね。これは先ほど少し説明もしましたが、こういう、本当に体育がなくなってほっとする、そういう学生が結構な割合いるわけです。体育嫌いというのはそういう学生も含まれますし、それから体育のこういうところが嫌っている、部分的に嫌っている、そういう学生も結構多いです。女性に限って言えば、スポーツ庁の調査の中で、女子中学生の場合、これは運動嫌いという、そういうことで調べていますけれども、4人に一人に上るっていう調査結果です。4人に一人というのは少数とも言えないぐらいのボリュームです。そういう人たちがやはりこの12年間もの体育、これ相当な時間とエネルギーを割いているわけです。その中で、もう体育なんてやりたくないわと嫌悪感を抱いて高校を終えていく、大学卒業していくっていうのは大きな損失だと思っています。その学生たちは体育が嫌いというだけではなくて、できない自分が悪いと思いつまんでいるわけですよ。「どんくさい自分が悪い、運動神経が悪い」と感じているのです。「不幸にもあんまり運動をする機会がなくて、うまくなれなくて」という、そういう感じですよ。そういう人たちに、「いや、そうじゃないんだよ。あなたが悪いんじゃないよ」と言わなければならないと思っています。スポーツというのは、その付き合い方にはもっと幅広いものがある。ところが、彼女たち・彼らは、スポーツとして頭に浮かぶのは競技スポーツなのです、ほとんどが。それができなかったから、もうだめ。ところが、いやいや、そうじゃない。上手くなるというのはスポーツの一部であって、そういうものではない運動との関わり方っていうのがあるんだよというところを実感することで、学生たちはやっぱり変わっていくし、自分の運動との関わり方を見つめ直すというか、そういう

機会になるわけです。そういうものこそね、やはりもっと大学ではなくて、小中高の必修になっている体育の授業の中で、もう少し幅広く、その人が自分なりのその運動との付き合い方、体との付き合い方を学ぶような機会っていうものがないといけないんじゃないか。うまくなればそれに越したことはないですよ、いろんなものを、それぞれの競技種目、好きなものを見つけて上手くなればそれに越したことはないですけども、やはりもう今のように小学校に入った段階で相当な差がついているというのが実態で、家庭の環境によって大きな差があるわけで、それを埋めていくのが難しい。そこで取り残されていく子どもたちは、体育に背中を向けていくわけです。運動・スポーツは、長い人生の中でいろんな意味合いを持ってくるわけで、時には健康のためだったり、あるときには仲間づくりであったり、あるときには自己実現であったり、いろんな意味を持つわけで、それがすっぱり切られてしまうっている現実を何とか是正したい。ジェンダー、セクシュアリティの視点から見ると、競技スポーツというのは一面的な運動への迫り方っていうものを強要していると言いますか、付き合い方を強要しているような側面があるだろうと考えています。それでは、具体的にどうするかという点については、いろいろご指摘はありましたけれども、それこそ共有していく段階にきていると思います。体育とジェンダー研究のこれからの話であります。そういった実践の蓄積というものが重要になるし、どうすればその部分を理解してもらえるかっていう、実践のためのペダゴジーと言いますか、どういうふうにすると教員にもあるいは子どもたちにも、今まで思い込んでいたものを変えるきっかけになっていくのかっていう点も含めて、いろいろな意味での、いろいろなレベルでの実践の蓄積というものがこれから重要だと痛感しているところです。きれいな結論と言いますかね、みなさんにこうすればいいというものはないかなかなか示せないというのが実情ですし、みなさんと一緒にやっていきたいというのが本当に私の思いです。ということでよろしいでしょうか。

高峰：どうもありがとうございました。もちろん、ここで何か一つの正解を示すということは難しいのですが、いろいろご示唆をいただけたのではと受け取っています。さきほど永末さんの質問で私も気付かされたんですけど、例えば体育の授業で男女が分かれてしまうときにですね、ある研究報告では担任の先生が体育だけではなくて日常的なクラス運営で男子と女子を競争させているケースがあるらしいんですね。日常的にそうなると、体育の授業で共修だからさあ一緒に協力しましょうとはなかなかならないですよ。そう考えると、体育の授業を超えて、学校文化というところも見ていかなければならないと思います。また身体接触ということを見ると、やはりこれは体育だけじゃなくて保健体育として考えて、例えば包括的性教育の視点から「相手を尊重する」とか「相手の身体に触れるということ」、そういったところもあわせてもっと丁寧に取り組んでいかなければならないのではないかと。そういう意味で、体育を超えた領域として考える必要性に私も気付くことができました。井谷先生のこれまでの研究をまとめていただき、今後の課題等々も示していただいたと思います。どうもありがとうございました。

水上博司：井谷先生、ありがとうございました。大変共感できる内容で、私も今後の研究の問いの中にジェンダー視点は必ず取り入れていきたいなと思っておりますし、やはり社会自体がジェンダーに対してもっと関心を持つ、そういう社会になっていかないとなかなか厳しい問題がこの箱の中にあるなというふうに感じました。それでは、第6回オンラインレクチャーシリーズ、こ

れにて終了したいと思います。本日はありがとうございました。

以上